

～多くの人に能楽を知ってもらいたい～



ふるはし 古橋 まさくに 正邦 さん(平方町)

撮影場所：古橋正邦さん宅能舞台(平方町)

「長浜でも能を盛り上げていきたいです」。物静かな中でも威厳を感じる声で語る古橋さん。観世流のシテ方として全国で公演を行っており、平成13年に重要無形文化財総合認定保持者となった能楽師です。

同認定保持者で、滋賀県文化奨励賞を受賞した父親の影響で幼い頃から能に触れ、自宅の能舞台で稽古を積みました。能が好きで、稽古も楽しみながらやっていた古橋さん。3歳のときに子方として初舞台を踏みました。その後、長浜曳山まつりの子ども歌舞伎にも2度出演。「父も出演したことがあり、ご縁を感じました」と当時を思い返します。

その後、父親も過去に師事した、人間国宝の九世片山九郎衛門(片山幽雪氏)の内弟子となるため京都へ。厳しい稽古

の中で、能の技術を磨き、28歳の時に長浜に戻ってきました。

京都を中心に全国で舞台を勤め、文化庁の事業で全国の小中学校での公演をこなしながら、自宅の能舞台や、近畿と東海各地で、「竹謳会」として能楽教室を開いている古橋さん。「よく耳にする『初心忘るべからず』という言葉は実は観世流の世阿弥の言葉で、若い頃から胸に刻んでいる言葉です。舞台上に立っている時も、能楽教室で指導をしている時も、常に基本にかえり、おごらないことを心がけています」と語ります。

全国で活躍する古橋さんですが、長浜で能を披露することはあまり多くないそうです。「長濱八幡宮の秋の例祭や今重屋敷能舞館で公演を行うこともありますが、能を披露する機会があま

りありません。秀吉の時代から長浜は能が盛んだったといわれているので、少し寂しい気持ちになります」と古橋さん。

そのような中、昨年、長浜青年会議所が主催した竹生島のライトアップイベントで、演目『竹生島』を演じました。「演目の題材となった場所、またライトアップされて幻想的な舞台で能を披露でき、とても感慨深く感じました」と語ります。

「披露する機会を増やしていったら長浜の多くの人に能楽を見て、興味を持ってほしい。能楽の面白さを知ってもらうことで、敷居を低くして、誰もが楽しめるようにしていきたい」。熱く力強い想いを持ち、秀吉の時代のように能楽を身近に感じられる長浜をめざします。